

たのしい資質開発 : フクろう大学の試み

中島, 祥好
九州大学大学院芸術工学研究院音響部門

上田, 和夫
九州大学大学院芸術工学研究院応用情報部門

<https://doi.org/10.15017/2794887>

出版情報 : 芸術工学研究. 6, pp.91-99, 2006-12-20. 九州大学大学院芸術工学研究院
バージョン :
権利関係 :

たのしい資質開発：フクロウ大学の試み

A Case of Faculty Development at Owl University

中島祥好、上田和夫

Yoshitaka NAKAJIMA and Kazuo UEDA

A Japanese book entitled “Study Manual for University Students: Welcome to Owl University” [Nakajima, Y. and Ueda, K. (2006). Nakanishiya.] was recently published. This book offers university students, including professors, a piece of advice on what they should be doing. Students are encouraged to think over the value of freedom in their university life. Faculty members are prompted to develop their own global viewpoints concerning the situation in which universities stand. In the present article, the philosophical background of the book, including the idea that Japanese universities should be assessed in accordance with an international standard, and the contents of the book are outlined. Finally, a possible way to guide promising young students is proposed.

1. 「大学生の勉強マニュアル」

各大学において、教員資質開発活動（FD活動）が盛んになされており、さまざまな成果が得られている。大学

はまず第一に教育機関であるということが改めて確認され、教員が、授業の計画をきっちり立てる、学生が授業内容を理解したかどうかを慎重に確認する、などの基本的な作法に気を配るようになったことは、大変意義深いことである。しかし、どのように意義深い活動であっても、その過程が複雑であるときには、本来の目的が十分に浸透せず、迷走する危険を孕んでいる。FD活動に関連しても、常に迷走の危険があることを認識し、それが本来の役割を果たすためには、どのような心構えが必要であるかを考えつづけることが求められるであろう。

われわれは現場の教員の立場から、高等教育のありかたについて根本的に考える機会を設けることが、FD活動には欠かせないのではないかと感じていた。しかしどの教員も忙しく、日々の生活の中では、意見を同じくする教員どうしが茶のみ話で気炎をあげたり、酒の席で元気

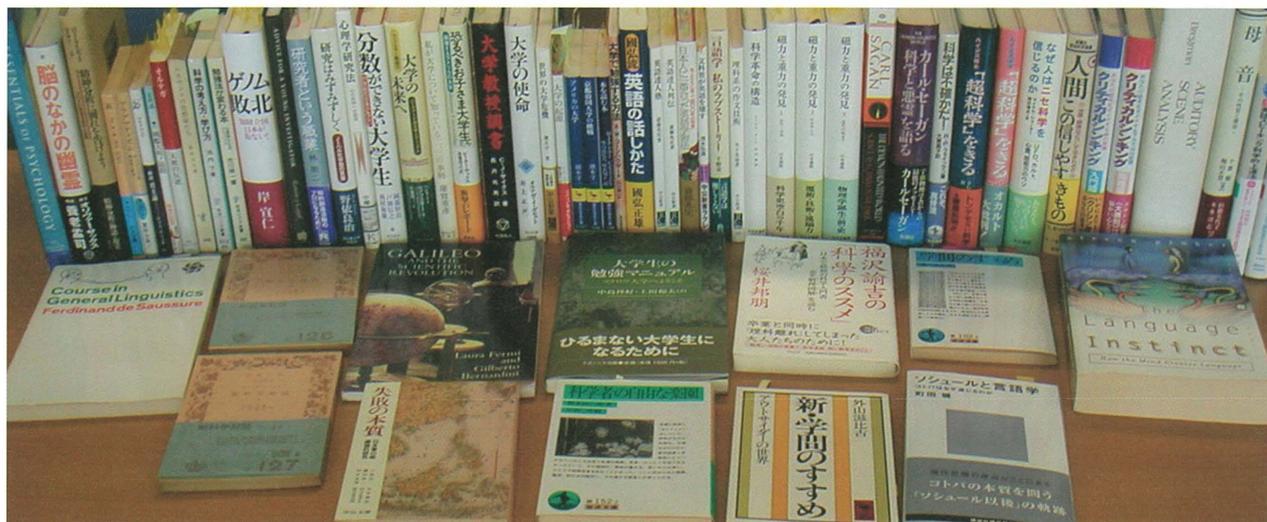


図1 「大学生の勉強マニュアル：フクロウ大学へようこそ」とその中で引用、紹介された書物の一部。

のよい学生を捕まえて説教したりすることで、終わってしまうことになりがちである。それはそれで精神衛生のために良いのかもしれないが、いつまでもお茶とお酒のつまみであっては進歩というものが無い。このように考え、喋りっぱなし、聞きっぱなしの事柄を文字にしておこうと思いたち、数年前に「大学生の勉強マニュアル」と称する文章をホームページに掲載した。その内容は大学生へ向けてのメッセージであり、自分の現在と未来について自分で決めることのできる、大学生としての立場を自覚し、責任をもってその自由を行使しなさい、というものであった（つまり、自分のマニュアルは自分で作りなさい、そのために必要な予備知識とたたき台はこれですよ、という「超マニュアル」である）。このメッセージは、一方では教育の現場において手取り足取り教えすぎることが、結局彼らの将来のためにはならないのではないかと、という教員への問いかけでもあった。彼らの将来とは、もちろん我が国の、ひいては世界の将来でもある。大学教員は基礎研究に徹すべきであるとのメッセージも籠めたつもりである。このホームページに対しては、さいわい一部の教員の方から熱いご賛同の声をいただき大いに励まされた。しかし、学生諸君がこれを活用してくれるということは、残念ながらあまりなかった。

九州大学大学院芸術工学研究院においては、栃原裕教授を拠点リーダーとする文部科学省 21 世紀 COE プログラム「感覚特性に基づく人工環境デザイン研究拠点」の活動が進められており、われわれも事業推進者としてこれに参加している。21 世紀 COE プログラムとは、全国の大学における全ての研究分野から、博士課程教育を充実させることを大きな目標として 300 近い拠点が選ばれたものであり、それぞれの拠点において教育の理念を明確にすることが求められている。われわれは、大学院教育の基礎は学部教育にあるとの観点から、改めてホームページ版「大学生の勉強マニュアル」をみなおし、その内容を拡充して、全国の大学生、大学教職員、さらには過去と未来の大学生を読者として想定し、「大学生の勉強マニュアル：フクロウ大学へようこそ」（以下、「勉強マニュアル」と略称する）という書物（図 1）として出版した（中島，上田，2006；中島，2006）。「フクロウ大学」という想像の世界を創りだし、面倒そうな内容を楽しく読めるような仕掛けを考えたことが、学生諸君に受け入れてもらいやすくなるために工夫した点である。さらに、われわれが大学における研究、教育に対して平日頃から

考えている事柄を、筋道を通して説明することに努めた。

本稿においてはこの書物の思想的背景を紹介し、日本の大学が目指すべき水準を考えるために、現在の日本の大学に対する国内外の評価について、最新のデータをもとに論じてみたい。そのうえで、上記の書物の構成を紹介し、学生諸君に「勉強マニュアル」を活用してもらうためには、さらに何が必要であるのかについて考察を行いたい。

2. フクロウ大学の思想的背景

学部教育が大学院教育の基礎である（「勉強マニュアル」第 2 章，p. 12）と述べるこの背景には、学生がまず学部教育を受けてから大学院に入学する、という制度上の理由を越えた歴史的な理由がある。戦後の我が国の教育制度がさまざまな点で米国の制度に倣っていることは周知のとおりであり、現在の我が国の大学院制度のモデルになっているのは太平洋戦争直後の米国の制度である。北米には、欧州の大学制度が 17～18 世紀に移植されたが、北米地域が文化的な後進地域であったために、大学を実業教育の場とせざるをえなかった。一方、19 世紀の初めにナポレオン 1 世との戦争に敗れたプロイセンにおいて、研究を通じて大学教育を行うとの近代的な大学の理念が明確にされ、この理念の影響を受けた欧州各地において爆発的な学術の発展を見た。とりわけ、自然科学においては、細分化された分野のいくつかにおいて集中的な人材、資源の投入がなされ、マクスウェル、パストゥール、ヘルムホルツ、コッホ、メンデレーフ、プランクなどの天才達に活躍の場を与え、ダーウィン、メンデルのような孤高の研究者にも勉学の間を与えることができた。米国においても、ドイツ留学を経験した少壮研究者などが、研究を通じての大学教育が重要であることを主張したが、それまでの米国の高等教育制度をいきなり変えるわけにはゆかず、大学よりも上級の教育機関である大学院を設けて、ドイツ式の高等教育を行うこととしたのである（潮木，2004）。

ところで、高等教育機関としての大学が、本来どこに特徴を有するかと言うと、商売や生産に直接関わらない教育、研究の内容が重視される点である（「勉強マニュアル」第 4 章，pp. 43-56；第 6 章，pp. 73-116）。このようにして実社会からは距離をおいた立場に立つからこそ、実社会に対して長期的視野を持った発言をすることがで

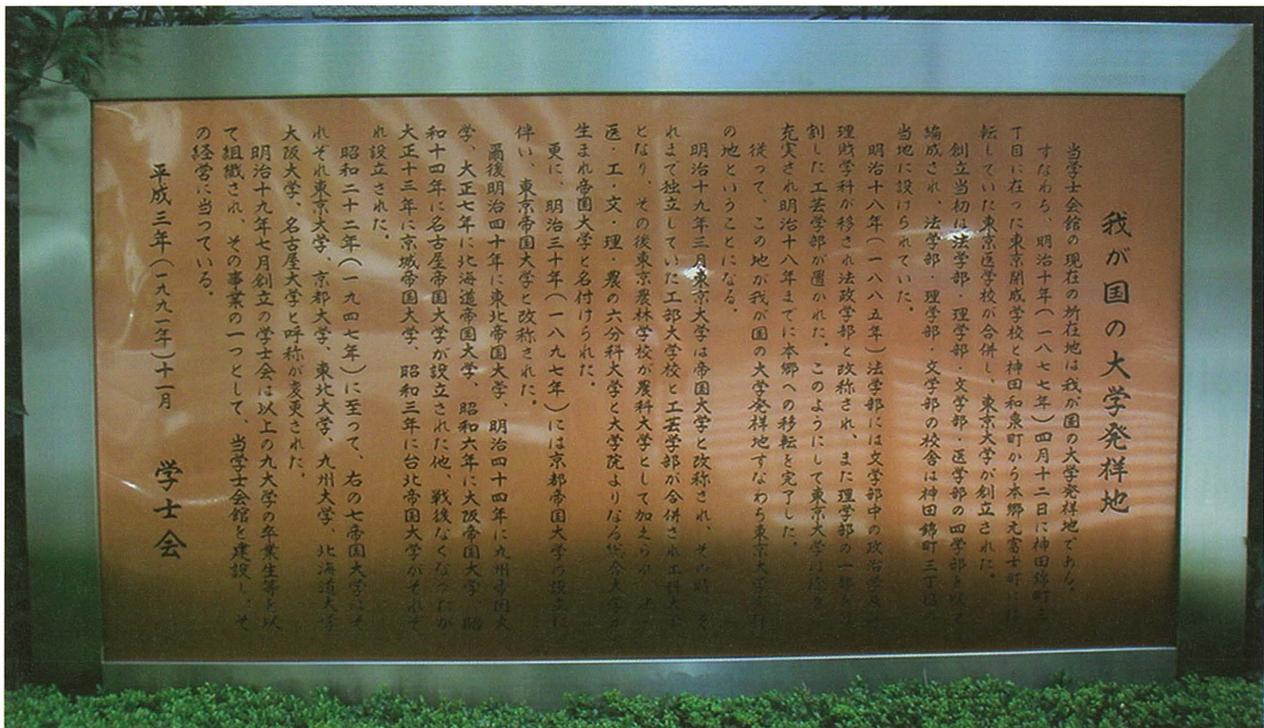


図2 東京都千代田区神田錦町の学士会館そばにある「我が国の大学発祥地」碑文(学士会, 1991)。

きるわけである。

ところが我が国では、大学制度が導入された当初から技術教育が重視されており、1885年には東京大学工芸学部が開設されている(図2)。他方では、工部省に管轄される工部大学校が、1877年に工業教育の機関として設立され、我が国の近代化を支える人材を輩出したが、1885年の工部省廃止に伴って文部省に管轄されるようになった。翌年、東京大学が改組されて帝国大学となった際に、工部大学校と東京大学工芸学部とが合併し、帝国大学工科大学となった。大学の権威が工業技術の分野にまで及ぶことは当時の世界では異例であり、我が国の大学制度がこの点では後発の利点を生かして最先端を走っていたことになる。科学、産業のいずれにおいても欧米に大きく遅れを取っていた我が国が、この英断によって世界でも有数の技術大国になりえたことは間違いないであろう。

このように、我が国においては大学と産業界との結びつきがもともと強かったために、大学が実社会から距離をおいて発言することの難しい場合がある。殊に最近、大学では「即戦力」としての人材を育てるべきであるとか、大学での研究は社会の「ニーズ」に速やかに応ずるべきである、といった類の議論が、その是非を論ずるこ

となく、当然のこととして持ち出されることが増えてきた。ここで、福沢諭吉が、幕末、維新の騒乱の中で、「慶應義塾は一日も休業したことはない。此塾のあらん限り大日本は世界の文明國である、世間に頓着するな」と塾生を励ましたことを思い出したい(福沢, 1899/1978)。福沢諭吉は「実学」の重要性を主張したとされているが、実はこの言葉は「学問のすゝめ」(福沢, 1872-1876/1942)をはじめとする福沢の著書に何度も登場するわけではない。その「実学」の内容を推測すると、決してすぐに商売や生産に結びつくような内容の学問を指しているのではなく、また、「飯を喰う字引」(福沢, 1872-1876/1942)を作るような学問でもなく、ものごとの実質的な仕組みについて理解することを旨とする学問を意味しているようである。彼自身、当時としては珍しい自然科学の啓蒙書を書いていることも、これを裏付けるものであろう(桜井, 2005)。この「訓蒙 窮理図解(きんもう きゅうりずかい)」という書物は、1868年(明治元年)に発行されている。日本では「ロウソクの科学」(ファラデー, 1861/1972)という翻訳名で知られているファラデーの講演記録が1861年に発行されたことを考えれば、福沢は世界的に見ても非常に早い時期からこのような啓蒙書の意義を理解していたことになる。

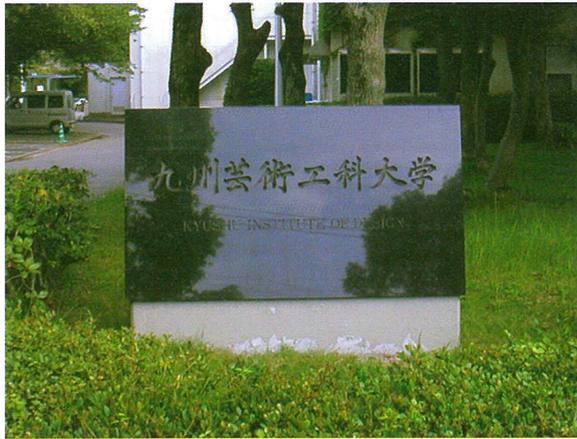


図3 「九州芸術工科大学」の重厚な門標（現在は写真のように正門奥に移設され、記念碑となっている）。

「技術の人間化」を標榜して1968年に設立された九州芸術工科大学（図3）が、2003年10月から総合大学である九州大学の一部局となり（図4）、新たな活動を開始することとなった。このことを、明治以来、大学と産業界との結びつきが一種の国策となってきた我が国において、学問と産業界との関係のありかたについて考えなおす絶好の機会が得られたと考えればよいのではなからうか。そのように考えれば、中央から「少し」離れた九州大学の地理的条件も、かえって都合がよいかもしれない。われわれは、人間と技術との関係についての基礎研究を行い、それを通じて社会における技術のありかたについて根本から考えることのできるような学生を育て、基礎研究の成果と卒業生の活躍とによって社会に影響を与えることが、当面目標とすべきところではなからうか。上掲の著

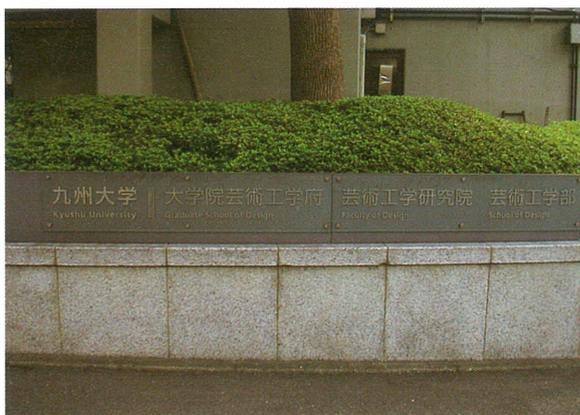


図4 「九州大学、大学院芸術工学府、芸術工学研究院、芸術工学部」の門標。

書において、本学のことに直接触れた部分のごくわずかではあるが（「勉強マニュアル」第6章，p. 94），書物全体を通して、このような考えを下敷きとして執筆を行ったつもりである。教員の側としては、このような大局観に立って、日々の研究，教育を行いたいと望んでいる。

3. 日本の大学の評価と今後の展望

文部科学省等の発表する種々の指標（科学研究費補助金採択額，21世紀COEプログラム採択件数，財務指標など）による我が国の大学ランキングなるものが新聞紙上などで話題にのぼることが近年増えてきたが，大学の評価を国内のみで行うことには本質的な限界がある。自分たちの足元をしっかりと保つことの重要性は認めるとしても，普遍的な真理を探究することが学問の本質であることはかわりがないので，大学であるからには世界の大学のなかでのランキングを気に留めるべきではないだろうか。もちろん，すべての分野において真に公平な評価を行うことは困難であるにしても，大まかに見て世界の一流校とそれに続く大学がどのように並んでいるのかについて，ある程度信頼の置ける尺度に基づいたランキングによって知っておくことは重要と考えられる。

最近，アメリカのNewsweek誌に，イェール大学学長のRichard Levinが執筆した大学の国際化に関する記事（Levin, 2006）と世界の大学のランキング（“The global top ten,” 2006）とがまとめて発表された。このランキングは，Nature, Scienceをはじめとする国際的な学術雑誌に掲載された論文数や，被引用回数，外国人学生のしめる割合などを大学別に得点化して得られたものである。雑誌には上位50位までのランキングが掲載されているが，インターネット版には100位までのランキングが掲載されている（“The top 100 global universities,” 2006）。これによれば，上位10位までは1位のハーヴァード大学，2位のスタンフォード大学，3位のイェール大学，6位のケンブリッジ大学，8位のオックスフォード大学など米英の超一流校が独占しており，50位までで29校，100位まででは44校を米国勢がしめている。要するに米国の大学の強さは圧倒的であると言ってよい。イギリスは14校，オーストラリアは7校，スイス，カナダはそれぞれ5校，オランダは4校，香港，ドイツはそれぞれ3校，シンガポール，フランス，オーストリア，スウェーデンはそれぞれ2校，イスラエル，ベルギーはそれぞれ1校が100位以内に入

表1 文部科学省の21世紀COEプログラム採択件数(2002-2004年度)による大学ランキング(上位10校)とNewsweekが発表した世界の大学ランキング(上位100校)との対応[横山(2004)および"The top 100 global universities"(2006)をもとに筆者が作成]。

大学名	COE 採択件数 ランキング	COE 採択件数 総計	Newsweek の ランキング
東京	1	28	16
京都	2	23	29
大阪	3	15	57
名古屋	4	14*	94
東北	5	13	68
北海道	6	12	-
東京工業	6	12	-
慶應義塾	6	12	-
早稲田	9	9	-
九州	10	8**	-

*名古屋大学から採択された14件のCOEのうち1件は、2005年9月に辞退が申し出られ、拠点形成が中止された。その理由は、「当初目的の達成は困難」ということであった(申請書に虚偽の業績記載が含まれていたことが問題となり、主要なメンバーが参加できなくなったことが引き金となった)。

**九州大学が実施しているCOEの件数は、2003年に九州芸術工科大学と統合したことにより、同大学が獲得した1件を加えて9件となった。

っている。その中であって、東京大学、京都大学、大阪大学、東北大学、名古屋大学と計5校の日本の大学が100位以内に登場していることは、言語上のハンディーも考えれば、大いに健闘をたたえられるべきであろう。特に東京大学は、非英語圏の大学において最上位である16位をしめている。

ところで、国内の大学ランキングにおいて、このような国際的な尺度に極めてよく対応しているものがある。それは大学内でもときどき話題にのぼる「21世紀COEプログラム(以下、COEと略する)」の採択件数によるランキングである。Newsweekのランキングに入った5校は、COE採択件数における上位5校であり、順序もほぼ一致している(表1)。これらがいずれも旧帝大であり、東北大学をのぞけば、推薦入試にもAO入試にも目をくれずに、難度が高いとされる学力検査を中心とした入試を堅持していることにも注目したい。COE採択件数から推測するならば、旧帝大のなかで北海道大学、九州大学というNewsweekのランキングに入らなかった大学も、もう少しで100位以内に入ることができるところまで来ているはずであり、さらに上を目指すことによって、学問の世界における日本の存在感を増すことに貢献できるだろう。また、九州大学が実施している九つのCOEの一つである旧九州芸術工科大学(現九州大学大学院芸術工学研究院)の21世紀COEプログラム「感覚特性に基づく人

工環境デザイン研究拠点」が負う責任は、このような意味でも重いと考えられる。実際、Newsweekのランキングには国家間の競争の意味もあり、件のNewsweek誌には関連記事として、イギリスのブレア首相が高等教育の費用を誰が負担すべきかという課題について寄稿しているほどである。

イギリスを除くヨーロッパの大学では、スイス、オランダ、オーストリア、スウェーデン、ベルギーといった小国の活躍が目立つ一方、大国であるドイツ、フランスの影が意外に薄いようである。筆者の考えでは、ヨーロッパの小国が健闘している理由は、これらの国々は常に世界の動向に気を配り、情報を収集する必要があること、多くの留学生を受け入れて自分たちのシンパを増やす必要があること、自国内だけでは学問的な刺激を得たり評価を行ったりすることに無理があるので、否応なく英語を身に付け、他国の人間に自分たちの研究を理解し評価してもらう必要があること、大学も観光と並んで主要な産業の一つと位置づけられていること、などではないかと推測される。裏を返せば、大国では言語障壁による閉鎖的な国内市場が形成されるため、世界の学問の流れから取り残されたり、情報を発信しそこねたりすることで、このようなランキングでは不利になるということもあるであろう。しかし、長い目で見れば、近代の学問を育んだ地としての伝統の強みが現れることもあるに違いない

と考える。

日本の周囲に目を向ければ、オーストラリア、香港、シンガポールという太平洋西岸地域の英語圏の興隆が目を見届げる。日本の大学にとっては、これら身近な英語圏に存在する有力大学とのつながりを作っておくことが、今後の発展のために不可欠と考えられる。それとともに、非英語圏でありながら非常に高い評価を得ているヨーロッパの小国との交流を深め、そのやり方を見習うことも必要であろう。

九州大学がより高い評価を得るためには、これらのことに加えて、九州大学に所属する研究者がこれまで以上に斬新なテーマの研究に挑戦し、Nature, Scienceをはじめとする超一流の国際学術雑誌にさらに多くの論文を発表することが必要である。そのためには出身国を問わずに優秀な人材と一緒に研究を行うことによる刺激も必要であり、留学生や長期滞在の研究者とその家族が気軽に利用できる宿舎の整備、海外からの滞在者が日本での生活や研究において壁に突き当たったときに滞在者の母語で問題を解決する手助けができる人材の配置、といった周辺環境を整えることも必要となってくる。このような条件を整えることが、ノーベル賞を獲得しうる人材を育成するための土壌ともなるであろう。逆に、周辺環境の整備や基礎的、体系的な教育の充実を行わずに、いきなりノーベル賞級の人材が何人も出現することは期待できない。

日本の大学に対する国際的な評価は、日本国内の多くのマスコミの論調に反して相当高いものである。明治以来、営々として積み重ねてきた努力によってようやくここまで到達したことを自らも評価し、その良い部分はさらに続けてゆく必要がある。また、制度的な改良を行うにしても、大きな目標を見失わないようにする必要がある。正しい道を歩んでいるという確信があり、国内でも国際的な評価と矛盾しない尺度で正当な評価を受けることができれば、学生も、教職員も、本来の力を発揮しやすくなるのではなかろうか。そのためにも、大学が目ざすべきものを学生諸君にしっかりと理解していただきたいと考える。

4. 「大学生の勉強マニュアル」の構成紹介

大学生向けの書物の構成を考えるにあたり、大学のあり方に関するわれわれの考えを現役の学生にも理解してもらう必要があると考えたため、素材となった「マニ

アル」に大学のあるべき姿について論じた部分を追加し、さらに読書案内なども付け加えて何度か全体を書き直し、最終的に以下のような構成に落ち着いた。まず、冒頭の「本書に登場する主なフクロウたち」で登場者の紹介を行い、第1章「リベル主任教授のあいさつ」では、フクロウ大学に入学してきた学生にリベル主任教授が大学生としての心構えを説いて聞かせる。第2章「フクロウ大学のおきて——大学生の勉強マニュアル：本編——」、第3章「フクロウ大学の使いかた——大学生の勉強マニュアル：実践編——」は、いわゆる「マニュアル」の部分であり、第4章「ようこそロゴス研究室へ——大学と基礎研究——」では研究室に配属された学生に基礎研究の意義を説き、その学生が試行錯誤をしながらも卒業研究に取りかかり、学部生向けの最上級マニュアルである第5章「フクロウ大学のこころいき——大学生の勉強マニュアル：研究編——」を読む。第6章「フクロウ大学の夢——大学生の勉強マニュアル：教員、研究員向けの解説——」は大学の教職員や研究者が持つべき大局観について述べているが、見どころのある学部生ならこども読むであろうことを期待している。この章を含むいくつかの章で、「研究を行うことによって教育を行うことが大学のあるべき姿である」というメッセージが発せられている。第7章は卒業する学生に贈る「リベル主任教授のはなむけの言葉」であり、そのあとに、「ホサト君の読書案内」、「リベル先生、ホサト君の仲間に語る」という読書案内が続く。本書では、引用文献のリストを付けるかわりに、引用した文献のすべてを簡単に紹介する形でここに記載している。そのかなりの部分は古典であり、学生にできるだけ多くの古典、良書を読んでもほしいという願いが込められている。ここまでの主要部分の草稿を読んでいた「フー先生」から玉稿をいただき、これを「フー先生の応援演説」として最後の部分で使わせていただいた。そして、「人間界の著者からの謝辞——本書の執筆をご支援くださった人間界の皆様へ」で全体を締めくくっている。巻末には読者の便を図るため、「事項索引」と「人名およびフクロウ名索引」が付けられている。

5. 大学生活における自由

さて、学生諸君にわれわれが伝えたいと願ったメッセージの一つに、「自由の意味について考えよ」ということがあるが（「勉強マニュアル」の随所、特に、第2章、

pp. 11-13; 第6章, pp. 96-104, 112-116; 第7章, pp. 121-122), 現状はどうであろうか。ある地方紙に, 次のような見出しの記事が掲載された。曰く, 「『自由』に悩む大学生」, 「休んでも何も言われない…自己責任が重荷に」, 「がんにがらめ, 流される半面, 楽な高校生活→ルールは全部, 自分に決定権, だから戸惑い」(「『自由』に悩む大学生」, 2006)。大学に入学して, 何でも自分で決めなければならないという自由の重荷に耐えきれず, 大学に行けなくなってしまう学生がおり, 大学側も対応を強化しているという記事である。

自由が重荷になって大学に行けなくなるほどの学生は——本人にとっては大問題であるものの——, さすがに少数であろう。しかし, 「ひょっとしたら, いまどきの学生は自由を煩わしく感じているのではないか」と思いあたる節は多い。たとえば, 「～について, 自分の考えを(自由に)述べなさい」といった類の問題を, 「自分が学生のころは, この手の問題には嬉々として答えたものだ」と思いながら出題してやることがある。すると, しどろもどろ, 支離滅裂な答案が提出されるのならまだしもなのだが, 「おもしろかった。」「感動した。」といった「感想」がいきなり述べられていて, 「考え」が述べられておらず, 「なぜ」「どこが」「どのように」おもしろかったのかもまったく書かれていない答案を目にすることが増えたようだ。これでは小学生の日記と大差はない, と言ったら心ある小学生に失礼であろうか。

また, 学生の受講態度を見ても, 授業に出席はし, 板書されたことは几帳面にノートに写し取るものの, 教師が話している内容を自分の頭で考えて理解しながらメモを取ることはあまりしないようである。ということは, ノートに書き写した(わずかな)板書の内容でさえ, 自分の血肉として本当に理解しているのかどうか疑わしい。実際, 「ちょっとこの計算をしてみなさい」と教師が促しても, 手を動かさそうとしない学生をよく見かけるようになった。よろずの事柄について受動的であり, 自分の頭で考え, 考えた内容を自分の言葉にするという積極的な行動を忌避する学生が目立つようになってきた。

このような問題は, 「自分の考えを述べなさい」という類の問に対してのみ現れるものではない。たとえば, 「講義の内容をまとめなさい」という問に対しても, 自分で自由に物事を考えることが不足しているために, 「内容の本質をまとめる」ということができないのではないかと思われるような答案が増えてきた。筆者の一人は,

ある科目の集中講義で2回, レポートを課した。1回目のレポートを回収して読んでみると, 題意とはかけ離れたレポートが予想外に多かった。そこで, 付録に示すようなメモを学生に配布し, 「まとめる」, 「自分の考えを述べる」とはどのような意味かを解説することにした。

実験心理学者としてのセンスから言えば, メモを配布した「実験群」の結果だけからは, このメモを配布したことの効果についてはっきりしたことは言えない。はっきりとした結論を導くためには, メモを配布しなかったことだけが実験群と異なる「統制群」を作って, 統制群と実験群との結果を比較することが必要となるが, ここではそのようなことまではしていない。この限界をわきまえたうえで, 筆者が知り得た断片的な事実を記せば, 2回目のレポートを期限までに提出した学生は1回目と比べて半減したものの, 提出されたレポートにはおおむね内容の改善が見られた。

公立学校が週5日制へと移行したことによって本格化したゆとり教育が, 学生の論理的思考能力と表現力とに悪影響を与えていることはほぼ間違いがないであろう。教える内容の削減が不合理なやり方で行われたため, 数学, 物理の体系的な教育が崩壊し, 論理的なつながりを無視した断片的な事項の丸暗記が奨励されているとも指摘されている(上野, 岡部, 2005)。「個を生かす授業」のお題目が「嫌いなことはやらなくてよい, 好きなことだけやればよい」と子どもたちに受け取られた結果(「サラリーマン」, 2006), 「凡人が独創性を発揮するためには基礎的, 体系的な教育を受けることが必要だ(月田, 2006; 上田, 2006)」との認識を持たない学生が増加したように思われる。また, 自分の希望するような仕事をすぐにやらせてもらえないことを我慢できない若者が増えている傾向も指摘されている(「サラリーマン」, 2006)。少子化による受験倍率の低下, マークシート方式によるセンター入試の定着, 入試科目の減少, 学力審査を正面切って受けずにすむ抜け道を造るような入試制度の導入と, 入試だけを見ても学力低下を促進する要因がこれでもか, これでもかと言わんばかりに大学に押し寄せてきている。学生が自由を持って余す問題にしても, 「大学に入学してくる学生の質が低下しているのだ」と言ってしまうばそれまでかも知れない。

しかし, 若者の潜在力にはいつの時代にも目を見張るものがあり, 心がけやもの見かたを変えることで, 本来の能力を発揮できるに違いないと信ずることにしたい。

大学生は、そして教職員も、大学における「自由」の意味を考えてほしい。「大学生の勉強マニュアル」が、現役の大学生にも、これから大学生になる人にも、また、かつて大学生であった人たちにも、そして大学教職員にも、自分の頭で考え、行動するきっかけとなれば幸いである。

謝辞

本報告を執筆するにあたり、九州芸術工科大学（現九州大学）の文部科学省 21 世紀 COE プログラム「感覚特性に基づく人工環境デザイン研究拠点」の補助を受けた。

付録

〇〇〇〇のレポート課題について

2006 年 7 月 1 日

上田 和夫

〇〇〇〇のレポート課題に関して、一部の学生に誤解があるようなので説明を補足しておきます。

1. レポート課題

課題は以下のようなものでした。

課題 1: 授業の内容を簡潔にまとめなさい。A4 レポート用紙 1 枚以内。

課題 2: 授業の内容に関して、各自の考えを述べなさい。A4 レポート用紙 1 枚以内。

2. 題意の説明

これまでに提出されたレポートには、題意を適切に理解していないのではないかと思われるものが見られました。以下に各課題の題意を説明しますので、次回のレポートを書く際に参考にしてください。

2.1. 課題 1

「まとめる」ということは、与えられた材料から適当に抜粋を行うことではありません。話のある部分を見無視して、自分が選んだ部分のみについて書くことでもありません。項目を列記することでもありません。

「まとめる」ということは、話全体が意味するところを包括的に表現する文章を自力で構成することです。つまり、まとめるためには自分の頭で考えなければならないのです。うまくまとめるためには、もとの話の表現を

断片的に利用するだけではだめで、内容と論理を変えずに適切な言い換えをする必要があります。そして、どんなに長い話であっても、その本質的な内容、話の筋道を一定の長さにまとめることは可能です（新聞小説では数ヶ月に一度、「これまでのあらすじ」が載るのをご存じでしょう）。

2.2. 課題 2

「考えを述べること」と「感想を述べること」とは違います。「考えを述べること」は、論理的なつながりをもった一連の思考について述べることであり、何かを論理的に明らかにしようという目的を持ったものでなければなりません。それに対して、「感想」は「印象」や「感じ」に近く、情緒的な価値判断であり、論理的ではありません。文学作品や芸術作品について「感想」をそのまま述べることは意味がありますが、学問的な内容については——感動を覚えること自体はよいことであるし、必要なことでもありますが——レポートに書くのは冷たい事実と論理だけにすること、すなわち、価値判断を離れた論理的内容にすることがルールです。自分のなかにある、私的、情緒的部分を切り離し、公共的、客観的な部分についてのみ書くことによって、より一般性のある議論をしようとするに価値を見いだしているのです。

また、ここでの課題は「自分の考えを述べること」であるので、とにかくにも自分の頭を使って考え出したことを書くことが第一に必要とされます。その考えが正しいかどうかを直接問題にしているわけではありません。もし、他人の考えを書き写せば、それは剽窃となってしまいます。

以上のことに留意していただき、題意に沿ったレポートを提出していただきたいと思います。

文献

ファラデー.(1972). ロウソクの科学 (吉田光邦, 訳). 東京: 講談社.(原典発行 1861 年).

福沢諭吉.(1942). 学問のすゝめ (岩波文庫, 青 102-3). 東京: 岩波書店.(原典発行 1872-1876 年).

福沢諭吉.(1978). 新訂 福翁自伝 (岩波文庫, 青 102-2). 東京: 岩波書店.(原典発行 1899 年).

学士会.(1991). 我が国の大学発祥地, 碑文.

「自由」に悩む大学生.(2006 年 7 月 11 日). 西日本新聞, p. 10.

Levin, R. (2006, August 21/August 28). The world's most global universities. *Newsweek*, CXLVIII, 8/9, 36-40B.

桜井邦朋. (2005). 福沢諭吉の「科学のススメ」--日本で最初の科学入門書「訓蒙 窮理図解」を読む. 東京: 祥伝社.

サラリーマン: 読者から (上). (2006年9月4日). 日本経済新聞, p. 38.

The global top ten and some next-best picks. (2006, August 21/August 28). *Newsweek*, CXLVIII, 8/9, 38-39.

The top 100 global universities. (2006, Aug. 13). *Newsweek: International Editions*. Retrieved September 11, 2006, from <http://rss.msnbc.msn.com/id/14321230>

月田承一郎. (2006). 若い研究者へ遺すメッセージ: 小さな小さなクローディン発見物語. 東京: 羊土社.

上田和夫. (2006). 小さな小さなクローディン発見物語, 月田承一郎著, 羊土社, 2006. 日本音響学会誌, 62, 756-757.

上野健爾, 岡部恒治 (編). (2005). こんな入試になぜできない: 大学入試「数学」の虚像と実像. 東京: 日本評論社.

潮木守一. (2004). 世界の大学危機: 新しい大学像を求めて (Vol. 1764). 東京: 中央公論新社.

中島祥好. (2006). こんな本出しました: 大学生の勉強マニュアル. 九大広報, 45, 33.

中島祥好, 上田和夫. (2006). 大学生の勉強マニュアル: フクロウ大学へようこそ. 京都: ナカニシヤ出版.

横山晋一郎. (2004年7月31日). 研究教育拠点に援助「COE採択」: 世界レベル30校 実質選出. 日本経済新聞.

付記

脱稿後, 「週刊東洋経済 2006年10月14日号」に「これが決定版! 本当に強い大学 財務力 就職力 研究教育

力」との特集が生まれ, 全国の大学のランキングが「日本の大学トップ100」として発表された (pp. 31-34)。ここでは, 「財務力」, 「教育力」, 「就職力」の三つの面から総合的に各大学の評価がなされている。「研究力」という項目はないが, 「教育力」の指標の一つになっている「科学研究費補助金」の総額などに研究成果に対する評価が間接的に現れているであろう。相当な有力大学がリストに載っていないことなどを考慮すれば, 少し注意して扱ったほうがよい資料であるが, そのことをわきまえううえで, 上位20校を下記に示す: (1) 東京大学, (2) 大阪大学, (3) 慶應義塾大学, (4) 豊田工業大学, (5) 創価大学, (6) 北海道大学, (7) 京都大学, (8) 東北大学, (9) 早稲田大学, (10) 北里大学, (11) 名古屋大学, (12) 九州大学, (13) 金沢工業大学, (14) 福井大学, (15) 神戸大学, (16) 広島大学, (17) 同志社大学, (18) 立命館大学, (19) 山梨大学, (20) 一橋大学。

このランキングから次のようなことが言えるであろう:

- 1) 東京大学を頂点とする旧帝大が強みを発揮している。
- 2) 伝統のある有力私立大学が健闘しており, 九州大学を抜いている大学もある。
- 3) 独特の財政基盤を持つ大学が, 科学研究費補助金の総額が少ないにもかかわらず, 上位に出てきている。
- 4) いわゆる地方大学でありながら健闘している, 金沢工業大学, 福井大学が目される。

このうち, 2) については, 表1に示した二つのランキングのうち, 国内のランキングにおいて見ることができた傾向であり, 3), 4) については, 表1のランキングのいずれとも対応のつけられない傾向である。このことは, 週刊東洋経済のランキングで用いられている指標の特性と, ある種のバイアスを反映していると考えられるので, 今後の考察の対象としたい。